

編集にあたって 姜尚中

巻頭言 三浦 徹

凡例

第1章

サファヴィー帝国の栄華

——イラン高原を支配したシーア派国家

近藤信彰

はじめに

イスマエーイル一世 (一四八七～一五二四)

- 一、サファヴィー家
- 二、帝国の建設
- 三、シーア派の採用
- 四、チャルディランの戦いへ
- 五、素顔と作品

006 003

アッバース一世 (一五七二～一六二九)

- 一、即位と実権掌握
- 二、内外への遠征
- 三、外交
- 四、軍制改革
- 五、行財政改革
- 六、帝都イスファハーンとファラハーバード
- 七、宗教政策と寄進
- 八、素顔と後継者問題

020

タフマースブ一世 (一五一四～七六)

ハイルンニサー・ベグム (?～一五七九)

マジユリスイー (一六二七～九九)

ジャン・シャルダン (一六四三～一七二三)

その他の人物

ドウルミシユ・ハーン／タージル／ハーヌム／サム・ミールザー／
 ミールザー・サルマーン／アッラーヴェルディー・ハーン／ジャーニー・ハーン／
 シャイフ・アリー・ハーン／ヴァヒド・カズヴィーニー／カラキ／
 シャイフ・バハーイー／ミール・ダーマード／ムッラー・サドラー／
 ムハンマド・ムフィード／イスカンダル・ベグ／ビフザード／ミール・イマード／

046 043 041 038 035

アラケル／サーイブ／ミールザー・ハリールの妻／カンファア／
ハーン・アフマド・ハーン／シヤラフツディーン／バーバーイー・ブン・ルトウフ／
シヤール・マフムード／ナーディール・シヤール

第2章

オスマン帝国の繁栄

東地中海世界におけるイスラームの盟主へ

林佳世子

はじめに

セリム一世（一四六七？～一五二〇）

- 一、誕生
- 二、王子時代
- 三、対サファヴィー戦争——チャルデイランの戦い
- 四、シリア・エジプト征服
- 五、セリム一世の死
- 六、セリム一世がもたらしたもの

スレイマン一世（一四九四～一五六六）

- 一、王子時代

- 二、即位
- 三、ベオグラードとロードス島の征服（一五二一～二二）
- 四、側近の争いとエジプト問題（一五二三～二四）
- 五、中央ヨーロッパ遠征など（一五二五～三二）
- 六、対サファヴィー遠征とイブラヒム・パシャの処刑（一五三三～三六）
- 七、地中海での勝利など（一五三七～三九）
- 八、中央ヨーロッパ情勢（一五四〇～四三）
- 九、メフメト王子没後のオスマン帝国（一五四四～四七）
- 一〇、第二次対サファヴィー朝遠征とその後（一五四八～五二）
- 一一、ムスタファ王子の処刑とコーカサス情勢（一五五三～五六）
- 一二、病床の一〇年と王子らの争い（一五五七～六四）
- 一三、最後の遠征（一五六五～六六）
- 一四、スレイマン一世の残したもの

ジェラールザーデ・ムスタファア（チエレビー）（一四九〇頃～一五六七）

ヒュツレム妃（一五〇五頃～五八）

エブースード・エフェンディ（一四九〇～一五七四）

バーキール（一五二六／七～一六〇〇）

スイナン（一四九〇～一五八八）

バルバロス・ハイレッティーン・パシヤ（一四七八頃～一五四六）

ソコツル・メフメト・パシヤ（一五〇五～七八）

その他の人物

セリム二世／ミフリマール皇女／ピーリー・メフメト・パシヤ／イブラヒム・パシヤ／
ハーデイル・スレイマン・パシヤ／リュステム・パシヤ／シャークル／ブスベック／
ピーリー・レイス／マトラクチュ・ナスーフ／カラ・メミ

第3章

衰退期か成熟期か

——一七〇一～一八世紀オスマン帝国を巡る二つの視点

宮下 遼

はじめに

121

女人天下時代の為政者たち

キョセム・スルタン（一五八九？～一六五一）

124

ムラト四世（一六二二～一六四〇）

129

スルタン・イブラヒム（一六一五～一六四八）

132

トウルハン・ハテイージェ・スルタン（一六二七～一六三三）

133

キョプリユリユ・メフメト・パシヤ（一五七五～一六六二）

135

一七世紀オスマン帝国の才人たち

キヤーテイプ・チェレビー（一六〇九～一七五七）

138

戦陣の学徒／帝国の学知の集大成／その著作が語ること／辺境のイスラーム帝国における信仰
と学問／イスラーム学知の総体——『諸書諸学についての疑問解題』

エヴリヤ・チェレビー（一六一一～一八四以降）

146

通人として／旅するイスタンブルっ子／帝国の見取り図『旅行記』／言語への関心

一七世紀の二大詩人

ネフイー（一五七二～一六三五）

155

ナービー（一六四二～一七二二）

157

チューリップ時代——戦のあと、利那の宴

アムジャザーデ・ヒュセイン・パシヤ（一六四四～一七〇二）

162

フエイズツラー・エフエンデイ（一六三九～一七〇三）

165

アフメト二世（一六七三～一七三〇）

167

ネヴシエヒルリ・イブラヒム・パシヤ（一六六〇～一七三〇）

170

イルミセキズ・メフメト・チェレビー（？～一七三二）

171

イブラヒム・ミュテフエツリカ（一六七四～一七四五）

175

ネデイーム（一六八一～一七三〇）

178

レヴニー・エフエンデイ（？～一七三二／三三）

180

パトロナ・ハリル（一六九〇～一七三二）

182

ムガル帝国の栄光

— アクバルからアウラングゼーブへ

真下裕之

はじめに

187

アクバル (一五四二〜一六〇五)

190

- 一、誕生から即位まで(一五四二〜一五六) 誕生／幼少期
- 二、即位と帝国形成の始まり(一五五六〜一五七二) 即位／兄弟と乳兄弟／新政権の担い手たち
旧臣／新政権の担い手たち——ティムール家親族／婚姻の絆／子供たち——ジャハーンギールの母親／新たな担い手——外来の人びと／新たな担い手——インド在来者のムスリム(二) アフガ
ン人／新たな担い手——インド在来者のムスリム(二) バラーのサイイドたち
- 三、新都ファトウプルの時代(一五七一〜一五八五) 新たな国家制度／アクバルとスーフィー教
団／帝国の秩序と諸宗教／帝国の秩序とペルシア語文化
- 四、ラーホール滞在の時代(一五八五〜一五九八) 帝国の秩序と歴史書編纂／ムガル帝国における
絵画
- 五、長い治世の終わり(一五九九〜一六〇五)
- 六、死後のアクバル

ジャハーンギール (一五六九〜一六二七)

229

シャール・ジャハーン (一五九二〜一六六六)

233

アウラングゼーブ (一六一八〜一七〇七)

237

その他の人物

240

ミールザー・アズィーズ・コーカ／マーハム・アナカ／ムンイム・ハーン／
 マーン・スィング／アーサフ・ハーン／ハキーム・マスイーフツザマーン／
 ミール・ジュムラ／ハーニ・ジャハーン・ローディー／サイイド・マフムード・バーラー／
 トーダル・マル／アフマド・スィルヒンディー／ジェロニモ・ザビエル／
 ヒーラヴィジャヤ・スーリ／アブドゥッラヒーム・ハーニ・ハーナン／ファイズイー／
 アブル・ファズル／ジャマルッディーン・フサイン／ターリブ・アームリ／
 チャンドラ・バーン／ニザームッディーン・アフマド／アブドゥッサマド／
 ゴーヴァルダン／マンスール／ムハンマド・フサイン・カシユミリー／
 マウラーナー・アブドゥッラヒーム／アマールナト・ハーン／
 ターン・セーン／セイディー・アリー・レイス／シャーンティダース／
 ムトゥリビー・サマルカンディー／フランシスコ・ペルサルトルト／トマス・ロー

アジアのイエズス会士

岡美穂子

はじめに

260

ザビエル (一五〇六〜一五五二)

261

新しい修道会／ヨーロッパ社会とキリスト教／バスク人とコンベルソ／布教保護権／イベリア半島のユダヤ人／ポルトガル国王の布教支援／ゴアの異端審問所／コンベルソの修道士たち／ザビエルの友「ならず者」の商人たち／ザビエルと日本／用語の問題／天竺から来た人々

ヴァリニャーノ (二五三九～一六〇六)

イタリア人のイエズス会士／巡察師ヴァリニャーノ／人文主義／ヴァリニャーノの「適応」／宣教師の外見／ヴァリニャーノの服装規定／藍色の衣／日本人宣教師／仏教寺院の「教会」としての転用／天正少年遣欧使節／聚楽第での謁見／カブラルとの対立／カルヴァーリオの「嫌日」／イルマンの退会者と托鉢修道会への転向者／東アジアのキリスト教布教／「神話」として利用されたザビエル

282

ジョアン三世 (二五〇二～五七)

エンリケ・エンリケス (二五二〇～一六〇〇)

フェルナン・メンデス・ピント (二五一四頃～八三)

アンジロー (?～一五五三)

ルイス・デ・アルメイダ (二五二五頃～八三)

ヴァレンティン・カルヴァーリオ (二五五八～一六三二)

その他の人物

ロベルト・デ・ノビリ／マテオ・リッチ／カブラル／ディオゴ・ペレイラ／

フェリペ二世／イグナシオ・デ・ロヨラ／ジェロニモ・ナダル

317

315

312

310

308

307

304

第6章

天下人とその時代

「ヨーロッパ」の登場と「鎖国」体制の確立

中野 等

はじめに

327

織田信長 (二五三四～八二)

濃尾平定／天下布武／勢力伸張／天下人へ／「世界」認識の拡がり／儒仏的価値観／高まる威勢／未完の天下

330

豊臣秀吉 (二五三七?～九八)

謎に包まれた出自／「創作」と「置換」のメタヒストリー／伝説の前半生／織田家での台頭／長浜城主・羽柴秀吉／中国経略／信長の後継／関白任官と豊臣賜姓／伴天連追放令／聚楽行幸と物無事／国内統一と御前帳徴収／対アジア強硬外交／果たせなかった「唐入り」／慶長の再派兵と不安な最期

337

徳川家康 (二五四二～一六一六)

三河松平家／今川家への隸従／今川からの自立／三河一向一揆／「徳川家康」の誕生／信長・信玄との同盟／武田家との攻防／五カ国領有／豊臣大名として／関東移封／豊臣家「大老」／天下人へ／將軍宣下／家康の対アジア外交／欧州勢力との関係／キリシタン禁制／家康政治の集大

353

徳川秀忠（一五七九～一六三二）

徳川家光（一六〇四～五二）

將軍親裁のはじめ／大君の国威／「武家諸法度」と政務体制／幕政機構の再編と沿岸防備体制の構築／武家社会の秩序化／明清交替

大友宗麟（一五三〇～八七）

千宗易（利休）（？～一五九一）

神屋宗湛（一五五三～一六三五）

宗義智（一五六八～一六一五）

朝鮮人被擄人

その他の人物

フロイス／顕如（本願寺光佐）／狩野永徳／ロドリゲス／アダムズ／伊達政宗／内藤如安／島津家久／松前慶広／井上政重／以心崇伝／土井利勝／山田長政／益田時貞

第7章

朝鮮王朝の国家的危機克服
——秀吉の侵略と後金（清）の侵入

辻 大和

はじめに

李舜臣（一五四五～九八）

李舜臣の家系と経歴／壬辰の乱（文禄の役）／丁酉の乱（慶長の役）／後世の李舜臣に対する評価（朝鮮）／後世の李舜臣に対する評価（日本）／逆境からの転換と後世の評価

光海君（一五七五～一六四二）

誕生から即位まで／世子として／各種復興／肅清／光海君の外交／仁祖反正と光海君の遺産

宣祖（一五五二～一六〇八）

柳成龍（一五四二～一六〇七）

毛文龍（一五七六～一六二九）

仁祖（一五九五～一六四九）

徳川家康（一五四二～一六一六）

ホンタイジ（一五九二～一六四三）

ヌルハチ (一五五九〜一六二六)

その他の人物

金誠一／金忠善／金高憲／鄭命寿／郭再祐／規伯玄方／休静(西山大師)／袁崇煥／
李适／李如松／朴蘭英／景轍玄蘇／昭顯世子／惟政(松雲大師)／崔鳴吉／
小西行長／宗義智／姜沆／加藤清正

461 459

第8章

朝鮮朱子学

川原秀城

はじめに

471

徐敬徳 (二四八九〜一五四六)

478

曹植 (二五〇一〜七二二)

481

盧守慎 (二五一五〜九〇)

484

李滉(李退溪) (二五〇二〜七二二)

488

李滉と朝鮮朱子学の大統一統／李滉小伝／朝鮮朝前期朱子学の集大成／中朝朱子学の分岐点／敬

の心学／四端七情分理氣論／理到説

李珥(李栗谷) (二五三七〜八四)

511

士禍の終了と党争の開始／李珥小伝／栗谷道学／新たな理氣心性論／朱子学の隆盛／高橋亨の
主理主氣パラダイムを超えて

その他の人物

532

程復心／程敏政／鄭道伝／権近／趙光祖／奇大升／成渾／朴淳／金麟厚／鄭述／
鄭仁弘

第9章

海と草原の明清交替——鄭氏台湾と康熙帝

豊岡康史

はじめに

543

鄭氏一族——鄭芝龍 (二六〇四〜六二)／鄭成功 (二六二四〜六二)／

鄭經 (二六四二〜八二)／鄭克塽 (二六七〇〜一七〇七)

545

一、倭寇の時代 日中貿易商人としての倭寇
二、「倭寇」の末裔・鄭芝龍の海上支配 VOCとの提携

- 三、鄭成功登場
- 四、鄭成功の政治的態度 独立を志向する鄭成功
- 五、台湾占領 VOCの撤退
- 六、鄭成功憤死
- 七、「国性爺合戦」と実態 鄭成功の「忠義」
- 八、鄭氏と清朝の交渉 台湾の位置づけ
- 九、鄭氏集団の台湾開発 原住民との衝突
- 一〇、遷界令と鄭氏東寧王国の滅亡 困窮する鄭氏集団／鄭氏一族の滅亡

康熙帝 (一六五四～一七二二)

- 一、即位とオボイ排除
- 二、三藩の乱 三藩の乱の鎮圧
- 三、ネルチンスク条約
- 四、草原の覇権争い 勢いづく清朝軍
- 五、盛世の基 清朝経済の成長
- 六、懊悩する老皇帝 清朝の盛世

李成梁 (一五二六～一六一八)

李自成 (一六〇六～四五)

フレデリック・コイエット (一六一五頃～八七頃)

セバステイアン・ロボ・ダ・シルベイラ (?～一六四七頃)

ガルダン・ハーン (一六四四～九七)

その他の人物

566

577

580

583

587

590

594

ホンタイジ／永曆帝(朱由榔)／呉三桂／施琅／中国のイエズス会士

第10章

経世学の展開と考証学の隆盛

明末清初期から清代の学術と思想

伊東貴之

はじめに

600

黄宗羲 (一六一〇～九五)

605

『明夷待訪録』の甚大な影響力／穏健なバランス感覚

顧炎武 (一六一三～八二)

614

王夫之(船山) (一六一九～九二)

618

清初の理学者たち

621

孫奇逢(一五八五～一六七五)／陸世儀(一六一一～七二)／張履祥(一六一二～七四)／

湯斌(一六二七～八七)／李顥(一六二七～一七〇五)／陸隴其(一六三〇～九三)／

唐甄(一六三〇～一七〇四)／熊賜履(一六三五～一七〇九)

顔李学派

625

顔元(一六三五～一七〇四)／李塏(一六五九～一七三三)／王源(一六四八～一七二〇)／

程廷祚(一六九一～一七六七)

浙西学派の学者たち

閻若璩（一六三六～一七〇四）

浙东学派の学者たち

全祖望（一七〇五～五五）

清代の史学者たち

趙翼（一七二七～一八一四）／崔述（一七四〇～一八一六）

呉派の学者たち

惠棟（一六九七～一七五八）／王鳴盛（一七二三～九八）／錢大昕（一七二八～一八〇四）

戴震

（一七二四～七七）

皖派の学者たち

段玉裁（一七三五～一八一五）／王念孫（一七四四～一八三二）／王引之（一七六六～一八三四）

揚州学派の学者たち

汪中（一七四五～九四）／凌廷堪（一七五七～一八〇九）／焦循（一七六三～一八二〇）／阮元（一七六四～一八四九）／劉宝楠（一七九二～一八五五）

常州学派の学者たち

莊存與（一七一九～八八）／劉逢祿（一七七六～一八二九）／龔自珍（一七九二～一八四二）

回儒と言われる人々

王岱輿（一五八四頃～一六五七頃）／馬注（一六四〇～一七二二）／劉智（一六七〇頃～一七四〇頃）

章学誠

（一七三八～一八〇二）

その他の人物

628 630 632 633 636 643 645 648 651 654 656

朱之瑜（舜水）／方以智／呂留良／梅文鼎／李光地

第11章

生まれ変わる聖者たちの光と影
——偽物の烙印を押された一人のダライ・ラマ

池尻陽子

はじめに

670

ダライ・ラマ六世（一六八三～一七〇六）

新ダライ・ラマ六世（一六八六～一七二五）

ダライ・ラマ五世（一六一七～八二）

サンギエー・ギヤムツォ（一六五三～一七〇五）

ラサン・ハーン（？～一七二七）

その他の人物

685

ダライ・ラマ三世／ダライ・ラマ四世／ダライ・ラマ七世／パンチェン・ラマ四世／
チャンキヤ・ホトクト二世／ジェブツンダンバ・ホトクト一世／グーシ・ハーン／
ガルダン・ハーン／康熙帝／ツェワン・ラプタン

673 677 680 682 684

近世東南アジアにおける
王国とムラユ世界の展開伊東利勝／川口洋史／北川香子
菊池陽子／青山 亨／菅原由美
田村慶子／今井昭夫／西尾寛治

はじめに……………

694

大陸部

ニヤウンヤン（二五五～一六〇六）……………

699

せめぎあう城市／天下統一／官僚制による統合／慣行による村落社会の支配／お飾りとなった
国王

ミンドン（二八一四～七八）……………

706

ナレースアン（二五五～一六〇五）……………

710

ナライ（二六三二～八八）……………

714

即位とベルシア人／日本との貿易とオランダ東インド会社／フランスとフォールコン／王の死
とその後

鄭玖（二六五五～一七三五）／鄭天賜（二七一八～八〇）……………

721

チエイチエツター（二五七九～一六二五）……………

724

スリニヤウオンサー（二六二三～九四／九五）……………

727

アヌ（二七六八～一八二九）……………

730

島嶼部

アラウデイン・リアヤット・シャー・アルカハル（？～一五七一）……………

734

イスカンドル・ムダ（二五八三頃～一六三六）……………

738

華麗なる戦績／国の統治／イスラーム／伝記

スルタン・アゲン（？～一六四六）……………

744

マタラム王国／マタラム王国の完成とオランダ／反乱の鎮圧と領土の拡大／文化面

トルノジヨヨ（二六四九頃～八〇）……………

750

ハサヌデイン（二六三二～七〇）……………

753

ラツフルズ（二七八一～一八二六）……………

757

その他の人物

バインナウン／デ・ブリトー／リエミエトウパテイ／ラーマ一世／山田長政／

759

茶屋四郎次郎／マフムード・シャー（ムラカ王国）／セノパテイ／
ヤン・ピーテルスゾーン・クーン／マフムード・シャー（ジョホール王国）／
ラジャ・クチル／羅芳伯

凡例

- ・本書の構成は、章ごとにまず中心となる人物について述べ、次いで当該人物を取り巻く重要人物について、さらに関連する人物について、項目を立てて述べている。ただし、例外的にこの構成を採らない章もある。
- ・本文中、その章で項目を立てた人物名等の初出に「▼」を付した。
- ・漢字表記については、原則として常用漢字を用いた。
- ・人名および地名等については、平凡社の『世界大百科事典』、『エリア事典』シリーズ、岩波書店の『岩波イスラーム辞典』、『古代オリエント事典』、その他の各種事典類を参照しつつ適宜検討し、採用した。
- ・ふりがなについては例外を除き、日本と中国の人名および地名等については日本語の読みによるひらがな表記、その他の漢字圏の人名および地名等については現地音によるカタカナ表記で付した。
- ・外国語文献の日本語訳については、特に断りのないものは執筆者による。また、日本の古典籍等については執筆者により適宜読みやすく整理した場合がある。
- ・引用文中の執筆者の補注については原則として「」を使用した。
- ・年代は原則として西暦（新暦）表記とした。月日については、西暦採用以前の東アジア地域では旧暦のままとした章もあるが、それ以外の地域については、特に断りのないものは西暦表記とした。
- ・イスラーム圏におけるヒジュラ暦等、西暦への換算にあたって二年にまたがる場合、原則として下一桁を「／」でつなぎ表記した（「一四〇〇／一年」等）。
- ・人物の満年齢と数え年については執筆者の表記を尊重した。